

# 整備事例集 vol.17

令和4年度整備事例集



掲載事例①

私たちのまちを  
私たちでつくる  
きっとまちが好きになる



掲載事例②



掲載事例③

## 掲載事例

- ①八景市場ANNEX (現・こずみのANNEX) — 自らつくり、つながる場所 (金沢区)
- ②地域で繋がり、楽しむ!多世代・多文化交流の新拠点! (緑区)
- ③地域コミュニティのごきげんな居場所づくり (都筑区)

ふ-しん【普請】「普く請う(あまねくこう)」とも読み、「力を合わせて作業に従事すること」という意味が含まれています。

「公共」は行政によってのみ担われるものではなく、特に地域に根ざした身近な課題への対応などに市民の皆さんが主体的に関わることで、参加する人や地域に暮らす人々の満足感を高めることにつながっていきます。「まち普請」には、市民に身近な「まち」に「普請」の輪を広げていきたいという願いが込められています。

# 八景市場 ANNEX(現・こずみの ANNEX)

## ——自らつくり、つながる場所——空間と時間のシェアハウス

金沢文庫駅に近い住宅地の中にある民家。入り口はちよつと古い造りですが、表に回ると、扉はなく、ブドウの蔓がからまるパーゴラ、その下には腰をかけたくなる小上がり、奥には何やら畑が見えます。思わず入りたくなる場所、それがこずみの ANNEX です。

この場所の仕掛け人は、平野さん、酒谷さん、藤原さんの3人。この地域はもともと戦後の復興住宅からスタートした街で共存共助の土地柄であったのに、アパートが増え、新住民も増えてどこにでもある住宅地に変貌していました。ここで生まれ育った平野さんは、自分が子どもの頃に感じていた街の活力が失



白を基調に植物の緑のコントラストが映える外観

われていることに気づきます。空き家・空室も目立つようになっていました。それは平野さんの父親が経営していたアパートも同様でした。そんな中で不動産を引き継いだ平野さんは、空洞化の波を盛り返すには街の人が楽しめる場所が必要だと考え、自らの関心事であった「食」をコンセプトに、地域に開かれたラウンジを併設したアパートメント「八景市場」を平成31年2月にオープンさせました。

酒谷さん藤原さん夫妻がこの土地に住むようになったのは、酒谷さんの関東学院大学への赴任がきっかけでした。住居を探す中で金沢文庫駅に初めて降り立ちます。共に建築に携わるお二人は、沿線の中でも乗降客数の多い金沢文庫駅の周辺であれば、住む人も多いので、地域で何か化学反応を起こすことができたら、それが大きくなるポテンシャルを秘めていると思ったそうです。偶然探し当てた「八景市場」に直感で入居を決めたその翌年からの新型コロナウイルス感染症拡大。慣れない巣ごもり生活の中で都市に集

まらずローカルでどうにかしなくてはいけないという気持ちにもなっていました。

お二人はちよつと子どもが生まれたタイミングだったので、藤原さんは地域で子育てする中で、少し辛いと思う時期がありました。引越してきて知り合いがほとんどいない中、近所の人があみんなどわいわいと喋ったり、頼ったり頼られたりという関わりがあまりありませんでした。しかし、子育ては一人でできません。そこで近所の人と交わるきっかけをつくらうと考えました。

そんな3人の問題意識が合致して、「八景市場」を中心に色々な動きが生まれます。その中でも大きなイベントが令和2年に行われた「ENOJOY LOCALー八景市場」マルシェです。新型コロナウイルスの感染拡大が一回落ち着き、制限が緩和されたタイミングだったこともあり、地域外も含めて2000人が集まり、大盛況でした。

このイベントと並行して、もう少し地域に住む人が日常的に気軽に施設の名称を、昔の地域の名前である「小泉(こずみ)」からとって、「こずみの ANNEX」と決めました。

整備を終えて、外からでも中の様子が伺えるようになった「こずみの ANNEX」。ここで学生が生活をしていることが、地元の安心感につながっています。現在20名ほどの「運営メンバー」がシフトを組んで当番している時間帯は、誰でも共用スペースを利用することができ、運営メンバーの友達がお茶をしたり、テレワークの場所として活用する人もいますが、一番多い利用者は子どもです。学校帰りに宿題をしたり、友達とゲームをしたりしています。歳の近い学生がいることも大きいでしょう。貸し切りでの利用も可能で民生委員の方々が会議をしたり、新たに手芸サークルが生まれたりもしています。

地域に開かれた庭の畑には多様なものが植わっています。そこで採れたものは利用者が自由に使えるので、ママ友のランチ会のサラダになったりします。ブドウの苗も植えられて、来年はシャインマスカットが食べられるかもと夢が膨らんでいます。

子どもから学生、ママ友や町内会の方々などが関わり、多世代の融合による化学反応が生まれています。

が、それが金沢区全域にも影響を与え始めています。金沢区が誕生した5月に合わせて区の誕生日を祝おうと動き出した「金沢区の日」イベントの企画・運営にも参画し、区内の多様な団体・人の、面的なつながりが生まれました。

街と人の化学反応が生まれるきっかけを作り、つなげて、さらに発展させている、こずみの ANNEX の今後に期待です。

利用でき、ご近所の良さを感じられる場所が必要だと考えていた平野さんは、10年ほど空き家となっていた住宅の活用方法について酒谷さんと藤原さんに相談して整備し始めたのが、「こずみの ANNEX」の前身となる「八景市場 ANNEX」です。

物件を見てすぐに、学生のシェア



外構も含め建物の解体など、手掛けられる部分は住民の手で工事を行った



キッチンも利用可能なので、貧切でお食事会なども催される

ハウスをベースにし、一部を時間を区切って地域へと開き、パブリックに使えるようにするという方針は固まりました。早速、町内会を含めて地域の方も巻き込んだワークショップを開催し、この街の将来像とこの施設の位置付けについて考える取り組みを始めました。実は以前よりヨコハマ市民まち普請事業を知っていた3人は、その時点ですでに申請することを念頭に置いていたとのこと。令和2年度内に自己資金と金沢区の「空き家等を活用した地域の「茶の間」支援事業」で耐震改修と居住環境整備を行い、令和3年4月から実際に学生が住み始めました。

そして、シェアハウスをより地域へと開いていくために、大きな開口部と縁側、みんなが使える庭を整備するため、まち普請に申請します。これまでの活動の積み重ねもあり、



誰でも利用できる時間に、自宅ではちょっと難しいバイオリンの練習に利用されることも

しかし、大変なのはここからでした。平野さんから中心メンバーの中にあった施設と活動のビジョンを、そのまま地域の方々に押し付けるのも違つと考えて、4月から4回ワークショップを実施して地域の意見を出してもらい、それを設計に落とし込む作業をしました。また、コンテストからワークショップの間に資材価格が高騰し、当初想定していた見積りに実際の費用が合わなくなつたのです。3社の工務店に断られ、「これは設計を変更せざるを得ないか」と諦めかけたころ、過去に付き合いのあった工務店が引き受けてくれて、令和5年3月に無事オープンすることができました。この間に、



八景市場 ANNEX(現・こずみの ANNEX)  
——自らつくり、つながる場所(金沢区)  
整備主体：食卓八景——つながりのリビングをつくる会  
整備場所：金沢区金沢東一丁目19番11号  
整備内容：学生シェアハウスの共用部(縁側、庭)  
竣工時期：令和5年3月

# 地域で繋がりを、楽しむ！多世代・多文化交流の新たな拠点！

お昼時のカフェ、スタッフとおしゃべりしながら赤ちゃんと一緒にランチを食べるお母さん、奥の席ではインド人の女性が何やら相談しています。シニアの男性は入ってきたお客さんと「日曜日は大変だったね」とイベントの話を始めます。ホールスタッフには「80代の男性。そのうち、みんな赤ちゃんとあやしはじめて、老若男女が輪になって笑い声がはじけました。カフェの前面は全面大きなガラスの開口部になっていて、午後3時を過ぎると前の道を通る大勢の小学生の姿が目に入ります。「あ、〇〇ちゃん！」と手を振れば、笑顔が返ってきます。商店街に買い物に来たママ友たちが、通りすがりにカフェの中に知った顔を見つけて手を振ります。カフェの中にも外とつながっている、なんだか不思議な空間が霧が丘グリーンタウン（霧が丘団地）にできた「ぶらっとKiriricafe」（通称キリカフェ）です。

キリカフェの特徴は、運営メンバーの多様性にあります。地域で活動する子育て世代・シニア世代・国



商店街の空きテナントの一面を整備。中からも外からもよく見通せるようにガラス面を多めにしている

際交流に関する3つのグループが協働して運営組織を立ち上げました。その中で運営の中心を担っているのが子育て世代の根岸さん、武蔵さんです。霧が丘にお住まいの二人は子どもが通う保育園で知り合いました。子育てするお母さん達が多くと助け合える地域にしたいと「まちプラス」という名前をつけて活動を始めた頃に「コロナ禍となります。家から出られないことが孤立を深める危険がある。だから助け合いや、つながりが大事」と自分たち

の活動の必要性を改めて感じて、コロナ禍であっても活動を停滞させずにいました。そのような中で、地区社協やケアプラザが関わり、シニア向けの取り組みを行っていた「福祉のまち霧が丘」（シニアグループ）、インド人の方たちと交流活動している「霧が丘インターナショナルコミュニティ（KICC）」に出会い、3者で定期的に情報交換会を持つようになりました。

「まちプラス」で七五三の家族写真を撮りたくて着付けのできる人を探していたところ、福祉のまち霧が丘のメンバーに聞くとすぐに人が見つかりました。多くの方の協力をいただき地域の中で「写真館イベント」を行ったところ大好評。さらに「私たち、お魚のさばき方知らないよね」というつぶやきから、近所のお魚の美味しいお店に相談したところ、「さばき方教室」を開いてくれました。そうだった取り組みが続いているうちに、二人は地域の多くの人と知り合い、「地域にはこんなスキルをもった人がいる。何かあっても助け合える」という安心感を持



石膏ボードのバテ塗りや内壁塗装など、可能なところはシニアや地域の小学生も作業を担った

ないの！」と驚き、二人はすぐに動き始めます。まち普請を知ったのが5月30日、翌31日には福祉のまち霧が丘、KICCのメンバーに相談し挑戦することを決め、締切前日の6月1日に申請書を作成、締切当日の2日に提出しました。団地の管理者であるUR都市機構の協力も得ることができ、「コンテストは無事通過」

「私たちのための制度」を証明するかのように、2次コンテストでは満票を獲得しました。コンテストに挑戦している期間について、根岸さん、武蔵さんは「締め切りまでしなければならぬことは沢山ありましたが、逆に締め切りがあったからこそ、色々な課題を乗り越えるこ

とができたと思います。そして、それはこの場所を継続していくためには大切なプロセスだった」と言います。

カフェの整備に向けては資材高騰のあたりを受け、なかなか工務店が見つからないなどの課題が発生しましたが、それもこれまでの活動と同じく多世代・多文化の様々な人の知恵と労力を持ち寄り解決できました。そして、令和5年1月にキリカフェがオープンしました。

キリカフェのお勧めは、街の料理自慢が毎日担当するランチ。インド人が担当する「本格カレーの日」、カウンターにお惣菜が並ぶ「お惣菜パイクングの日」など、曜日ごとにバラエティに富んだメニューを提供しています。



料理自慢の手による日々のランチは大人気

また、いろいろな「あったらいいね」がキリカフェに寄せられるようになり、「学習のサポート」や「離乳食」に関する講座、地域で活躍する人をゲストに懇談する「車座トーク」などが生まれました。元々活動していたインド人の大人向けの日本語教室や子ども向けの英語教室もキリカフェができたことで定着しました。他にも、インド人からの希望で、近隣のスーパーでは手に入り



各種教室は子どもも大人も多国籍。(左)子ども向け英語教室、(右)大人向け日本語カフェ

が作って提供してくれるようになり、朝の野菜が並ぶ時間はまるでトルインディアです。そのため、この地域に引越してきたインド人がますます訪ねてくる場所にもなってきました。「日本の小学校に子どもを入れたい」という相談者が訪れたら一緒に申請書を書くなど、ニーズに合わせて徐々に事業が増え、多国籍・多世代の住民にとっての地域の頼れる場になりつつあります。また、放課後は子どもが「トイレを貸して下さ

い」と駆け込んで来たり、宿題を持ってきて熱心に取り組む姿もあり、子どもの居場所としても定着しつつあります。

「スタッフの数はまだまだ足りないし、持続可能な場にするためには、給料を払うことも考えたいし、課題は山積み！」と根岸さん、武蔵さんは言いますが、きっと地域の人々さんの人の知恵とスキルで乗り越えられるはずですよ。

そんな折、ヨコハマ市民まち普請事業の話が聞きます。「私たちのまちを、私たちでつくるための制度？これは、自分たちのための制度じゃ

**地域で繋がりを、楽しむ！多世代・多文化交流の新たな拠点！(緑区)**

整備主体：まちも霧が丘現NPO法人 霧が丘ぶらっとほーむ

整備場所：緑区霧が丘3丁目26番1号305

整備内容：コミュニティカフェ

竣工時期：令和5年1月

# 地域コミュニティの「ぎげん」な居場所づくり 「モヤキラCAFE」―「わたしらしく生きる」を応援する場に

平成27年に都筑区役所が主催した「輝く女性応援講座」に集まった参加者は、「私は何をすればいいんだろう?」「というモヤモヤを抱えていました。参加者のそれぞれが孤立して悩んでいることに気が付き、だったらみんなで解決しよう、女性が主体性をもって自分らしく社会と関わっていきつかけ作りをしよう、という活動に展開します。モヤモヤをキラキラに変えようという意味で、



モヤキラCAFEの内観。奥のキッチンを整備した

平成30年「モヤキラ委員会」が発足しました。この時に代表を引き受けたのが有好きさんです。

モヤキラ委員会は、区役所から委託を受けて講座の企画運営を担うようになり、「私らしくって何?」「幸せって何だろう?」など、毎年テーマを決めて、自分たちの課題解決に取り組みました。その中で、地域密着で地域のために動いている団体との出会いがありました。また、たくさんさんのボランティア活動が、課題解決に動いていることにも気づきます。ボランティア活動の面白さ、人と違うことを否定しない進め方、コミュニケーションの取り方などを学んでいきます。

そんな中で「ボランティア活動は有意義な活動なのに、多くが短命。なぜ続かないのだろう?」という疑問が生まれます。仲間たちと議論するうちに「やりたいこと」をボランティアで継続するには収益事業も行う必要があると気づき、収益化プ

われたのです。初めて聞く制度で、「何、それ?」という状態でしたが、候補となる場所もあったことから、拠点を整備するために応募することにしました。



モヤキラCAFEでのランチ会の様子



曜日店長との1枚。  
カフェの利用者にとっても楽しい企画になっている

ねて運営方法を学びました。一方で、1次コンテストの後、予定していた場所が使えない状況になり、場所探しに奔走することになりました。たくさんさんの不動産事業者をまわる中で、地域活動に理解のあった株式会社エリアプロジェクトに出会いました。同時に、センター北駅にあるビジネスコミュニティの拠点「まちなかびんづつき」を協働運営できることになり、その拠点の一角に「モヤキラCAFE」を整備することになりました。

令和4年からはセンター北駅からすぐのシンボルロードで開催される「みなきたマルシェ」の運営に携わるようになり、事業者との信頼とつ

プロジェクトをスタートさせます。そして、一般社団法人モヤキラを設立することにしました。

活動が活発になると困るのが場所。打合せをするにも喫茶店でコーヒーを飲みながらでは制約が多く、



ながりが生まれました。地道にネットワークを広げた結果、地域で応援してくれる方も増え、無事2次コンテストを通過しました。

そして、令和5年2月、センター北駅から近いビルの二階に、みんなの想いが詰まったモヤキラCAFEがオープンしました。曜日ごとに違う店長が提供するランチが目当てのお客さん、美味しいコーヒーでくつろぐお客さんなどで毎日「ぎわわっています」。曜日店長「たちは」ここで経験を積んで、新しい事業にふみ出すきっかけをつかむこともできます。また、居場所づくりサポーターが常駐しているので、日ごろモヤモヤを抱えている人たちがからっと立ち寄って、相談することもできます。

さらに、まちなかびんづつきのコーヒーキングススペースやレンタルスペースなどのオフィス機能を利用することにもつながります。最近ではレンタルスペースで地域の団体が打ち合わせをすることが増え、新たに企画が持ち込まれるようにもなりました。このように、まちなかびんづつきの中にあることが、相乗効果を生んでいます。

令和5年度には、みなきたマル



建物の2階にあるためこの立て看板が目印。  
センター北駅から徒歩約3分の場所に位置する



さらに、この時期から「コロナ禍となり、活動もオンラインが多くなりました。」「気軽に集まれる場所がほしい」と現実的に考え始めていた折に、複数の人から「ヨコハマ市民まち普請事業に応募すればいいのでは」と言

シエ実行委員会と横浜市歴史博物館が連携し、「歴史未来フェス」を開催しました。他にも「センター北をもっと盛り上げよう」という試みが地域とともに広がっています。

モヤキラCAFEができてから、「センター北が盛り上がるきっかけとなる居場所ができた」と言われているそうです。女性たちのモヤモヤが変身し、キラキラしたまちを作りつつあります。

**地域コミュニティの「ぎげん」な居場所づくり (都筑区)**

整備主体：モヤキラCAFE実行委員会  
 整備場所：都筑区中川中央1丁目21番3号  
 ドウエセンター北201

整備内容：コーヒーキングススペース内にカウンター付きキッチン、情報提供ボード  
 竣工時期：令和5年2月

**Access Map**

# 「ヨコハマ市民まち普請事業」とは

市民の皆さんが主体となって行う、地域の課題解決や魅力向上のための施設整備を伴うまちづくりに対して、支援、助成を行う事業です。

施設整備のアイデア検討やコンテストへのチャレンジ、地域の方々との合意形成、整備への労力提供などの機会を通じて、地域コミュニティが活性化し、地域まちづくりの輪が広がることを目的としています。

コンテストの年度(令和3年度)

整備の年度

自ら主体となって  
生活環境の整備を  
したい市民グループ

4月上旬～5月下旬  
整備提案募集

ヨコハマ市民まち普請事業部会による選考  
(学識経験者・まちづくり実践者・市民委員(公募))

7月上旬  
1次コンテスト  
開催

9月  
活動懇談会

1月下旬  
2次コンテスト  
開催

市民自ら  
整備・維持管理を実施  
整備助成金として  
最大500万円を交付

## 横浜市地域まちづくり推進委員会

ヨコハマ市民まち普請事業部会委員(令和3年度選考委員) ※所属は令和3年度時点

- 杉崎 和久(部会長) 法政大学法学部教授(都市計画、まちづくり)  
朝比奈 ゆり 東京ボランティア・市民活動センター専門員(市民活動支援、みどり環境)  
飯尾 友子 本牧山頂公園和田山地区愛護会会長(まちづくり、市民活動)  
植松 満美子 市民委員(公募)  
加藤 功甫 市民委員(公募)  
川原 晋 東京都立大学都市環境学部教授(市民事業、観光まちづくり、都市デザイン)  
後藤 智香子 東京大学先端科学技術研究センター特任講師(まちづくり、住環境、こども環境)  
松村 正治 NPO法人よこはま里山研究所理事長(市民協働、環境社会学)

ヨコハマ市民まち普請事業

## 整備事例集 vol.17

令和4年度整備事例集

- 発行 令和6年1月  
横浜市都市整備局地域まちづくり課  
〒231-0005 横浜市中区本町6丁目50-10  
TEL 045-671-2679 FAX 045-663-8641
- 編集・デザイン 横浜市住宅供給公社
- デザイン・印刷 山陽印刷株式会社

あちこち・ドキドキ・ハマのまち  
**都市整備局**

「まち普請事業」についてはホームページをご覧ください。  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/>



Webで検索

Facebook「ヨコハマ市民まち普請ひろば」もご覧ください。  
<https://www.facebook.com/yokohama.machibushin>



Webで検索